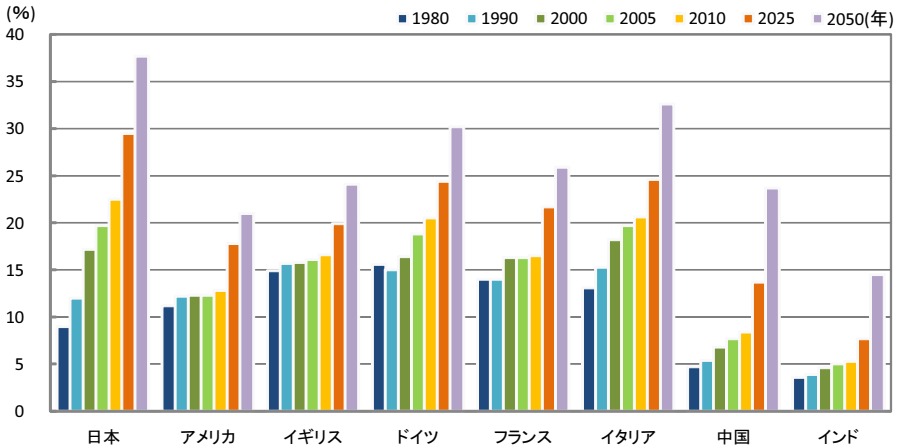


2-3 老年人口比率（65歳以上人口）



▶ グラフの具体的な数値及び資料出所については、「第2-5表 高齢人口(65歳以上人口)」(p.63)を参照。

出生率の低下と平均寿命の伸長により、高齢化が進む諸国が増加傾向にある。2005年から2050年の間の世界人口の増加の半数は60歳以上人口の増加によるもので、これと対照的に、15歳未満人口は著しく減少する見通しである。2005年時点で6億7,300万人であった60歳以上人口は、2050年には20億人に達するとされている。とりわけ先進地域における高齢化の進展が顕著で、2005年時点の2億4,500万人から2050年には4億600万人とほぼ倍増する一方で、60歳未満人口は9億7,100万人から8億3,900万人に減少すると推計されている。

上のグラフは主要国における高齢人口(65歳以上)比率の推計を示すものである。2005年における全世界の人口に占める高齢人口比率は7.3%(4億7,700万人)であるが、2025年には10.5%(8億3,900万人)に及び、2050年には16.2%(14億9,200万人)に達すると推計されている。このうち特に80歳以上人口の伸びが顕著で、2005年時点の1.3%(8,800万人)から、2050年には4.4%(4億200万人)にまで及ぶ見通しである。

このうち先進地域の高齢人口の動向をみると、2005年時点で既に人口比率が15%を超えており、2025年には20%を上回るとの推計となっている。上のグラフのとおり、とりわけ日本の高齢化は急速で、2010年、2025年、2050年のいずれの推計でも欧米先進諸国を上回っており、極めて高齢人口の割合の高い国になると予測されている。

他方、現在は比較的出生率が高い途上地域でも、出生率の低下と平均寿命の伸長により、高齢化の進展は急速であるとされており、2005年時点では5%に過ぎない高齢人口比率は、2050年には14.7%に達する見通しである。上のグラフからも、中国やインドの高齢化が先進諸国より急速であることがわかる。